

巻頭言

〔年報〕第一集

《ああ、とうとう書いてしまった！》

『父阿部次郎 愛と死』の著者大平千枝子さんは、この書の「あとがき」をこのような言葉で書き出しています。本文を読み終えて、父と娘との間に張られた一種の緊迫感から解放されたとき、私は大変自然に右の言葉を納得することが出来ました。

故阿部次郎氏の『三太郎の日記』が、大正初年から昭和初年にかけての青年層に熱読され、これらの胸に思索と詩想をつよくよびましたことは周知のとおりです。そして今日なお新しい読者が若い人たちの間に生まれつつあることも事実です。これはこの書の永遠性を語るものですが、それはさておき、大平千枝子さんはその阿部氏の第三女として生まれ、成人の後東北大学に学び、やがて同大学工学部教授大平五郎氏の夫人となりました。

阿部氏は厳格な「人格主義」の理想をもとにして、女性や家庭の問題もきびしく裁断するように見うけられました。そのことは例えば、つぎのような文章にも明らかに看取されます。「人がこの無限に多角的な世の中に生きて、とにかく何か残すに足るものをのこして死のうとするには、どれほど断念しなければならぬものが多いでしょう。断念して集中する努力を必要とするでしょう。その断念と集中とによって組織された生活こそ、古人の言う『この一筋につながる』生き方であることを僕は信じます。そうして結婚した婦人の生活は、この意味において、家庭本位であるべきことを僕は主張するのです」。（ある花嫁に贈る言葉）

このような女性観は、むろん娘である千枝子さんにも適用され、娘がものを書いて発表することなど好みませんでした。「二十五になっても、三十になっても、『まだ早い』『まだ早い』と言いつつ（あとがき）る有り様でしたが、それは、「父にとつて、娘がいつまでも未熟な子供に見えることのほかに、ものを書くというすさまじい業が静かなつましい家庭の仕合わせを破壊することをおもんばかった」（同）ためでもありました。しかし、こうした「父の強大な影響力」（同）の中で成長した千枝子さんは、生活を重ねるに従って、言いたいこと——言わずにいられないことを胸に畳んでいき、やがて父のものを離れて新しい生活を築いていくにつれ、おずおずと少しずつそれを発表するようになったのです。その千枝子さんに、「飯をこげつかしたり家を埃だらけにして置くと、荒廢の悪魔があとからしのび込む」（ある花嫁に贈る言葉）という父の

声がたえずささやきかけていたけれど、「私は書くことと子供を育てることに夢中であり、夫も又、黙ってそれに耐えてくれた」（あとがき）と書いています。

「こうして私は、人生のある時期においては、家に埃をためながらも仕事を続けなければならぬ場合があり、埃っぽい家庭にも——あるいはその埃のために一層——止むに止まれぬ真剣な協力の生活が営まれ得ることを悟るようになった。それは父には無関係な、私たち夫婦の新しい体験であった」（あとがき）という告白をきくとき、「父の強力な影響力」を越えて、娘の叡智が新しい人生を拓きえたことを知るのである。このことは、小宮豊隆氏が「序」の中で、「事実千枝子は阿部次郎の最も見事な娘になってゐて、次郎の持つてゐる長所が随分沢山伝へられて居り、センスの見事さのみならず、そのセンスをどう正しく活かして行くべきであるかと、哲学的にしっかり検討して行くことができるやうになってゐる……」と書いていられることと符合するようである。

「父と娘」の、見事な継承関係がここに実現されているように思われ、この書は私の最近もつとも感銘をうけたものの一つです。

（昭和六〇・三）